

## 日英多義語の認知意味論的分析-「コトバ」と“word”-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/7296">http://hdl.handle.net/10098/7296</a>

# 日英多義語の認知意味論的分析

## －「コトバ」と“word”－

皆 島 博<sup>(\*)</sup>

(2012年 9 月24日 受付)

キーワード：多義語，意味拡張，認知意味論，日英対照言語学

### 0. はじめに

本論では，日本語の名詞「コトバ（言葉）」と英語の名詞“word”を取り上げ，その多義構造および意味拡張のプロセスと動機づけについて，認知意味論の観点から分析を行う。日本語の「コトバ」と英語の“word”は，両語ともに使用頻度が高いと思われ，それぞれ，次のような，少なくとも4つの異なった意味で用いられる点で多義的である。

- (1) a. <単語>：意味がわからないコトバは辞書で調べてください。  
b. <スピーチ>：これよりご来賓からお祝いのコトバをいただきます。  
c. <方言>：同じ福井県でも嶺北と嶺南とではコトバが少し違います。  
d. <個別言語>：外国のコトバをペラペラしゃべれる人がうらやましい。
  
- (2) a. <単語>：This dictionary contains over 100,000 words.  
(この辞書は10万語を収録している)  
b. <歌詞>：I like the words of this song.  
(私はこの曲の歌詞が好きだ)  
c. <約束>：Betty always keeps her word.  
(ベティはいつでも約束を守る)  
d. <情報>：I have no word of John's whereabouts.  
(ジョンの所在について情報が<sup>ない</sup>)

---

\*福井大学教育地域科学部人間文化講座

認知意味論では、上のような日本語の「コトバ」と英語の“word”が提示するさまざまな意味（語義）が無秩序に派生してきたものではなく、プロトタイプの意味（＝基本義）を出発点として、そこからなんらかの認知的動機づけによって意味拡張を展開し、相互に関連のある意味と意味とのネットワークを構成するようになったと考える。本論の目的は、「コトバ」と“word”に関して、次の4点について、認知意味論の立場から記述<sup>1)</sup>を行い、それらを明らかにすることである。

- (3) a. 「コトバ」と“word”の複数の意味（＝多義）の認定
- b. 「コトバ」と“word”の意味のプロトタイプ（＝基本義）の認定
- c. 「コトバ」と“word”の意味拡張とその動機づけの認定
- d. 「コトバ」と“word”の多義構造にみられる類似点と相違点

### 1. 語の意味拡張と放射状カテゴリー

一般に、1つの語が2つ以上の意味を持つ場合、その語は多義的であるといい、複数の意味・語義をそなえた語を多義語という。このような語の多義性について、認知意味論では、カテゴリー拡張の結果生じたものと捉えるのが一般的である（Lakoff; 1987, Sweetser; 1990, Taylor; 1995）。カテゴリーとは、アリストテレスの時代の古典的カテゴリー観では、そのすべての構成員が構成員であるための必要十分条件を満たすと定義される集合であり、中心的構成員と周辺の構成員の区別はないと考えられていた。しかし、近年、古典的カテゴリー観は語の意味の分析には必ずしも適さないことが指摘されてきた。非古典的カテゴリー観では、カテゴリーの構成員の必要十分要件は、「+（プラス）」か「-（マイナス）」かの二元論に基づいて与えられるものではなく、構成員の間には中心的構成員と周辺の構成員の区別が存在するだけで、カテゴリー間には明確な境界線は存在しないと考える（Wittgenstein; 1978, Labov; 1973, Rosch; 1975, Lakoff; 1987）。

認知意味論では、多義語という一つのカテゴリーは、多くの場合、古典的カテゴリー観の要件を満たすものでなく、カテゴリーの中心にはプロトタイプの意味（基本義）が存在し、そこからメタファーやメトニミーなどの認知的原理（動機づけ）に応じて複数の方向へと意味拡張が展開していくものとする。このようなカテゴリーの最も一般的な形態が放射状カテゴリーと呼ばれるものであるが、放射状カテゴリーは、Lakoff（1987）で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心的（プロトタイプの）メンバーを取り囲むように2次的に周辺の（非プロトタイプの）メンバーが位置づけられ、その2次的なメンバーを中心にさらに3次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう（辻 2002: 238）。

放射状カテゴリーのイメージを図示すると下記のようになるが、中心に位置する●は1次的メ

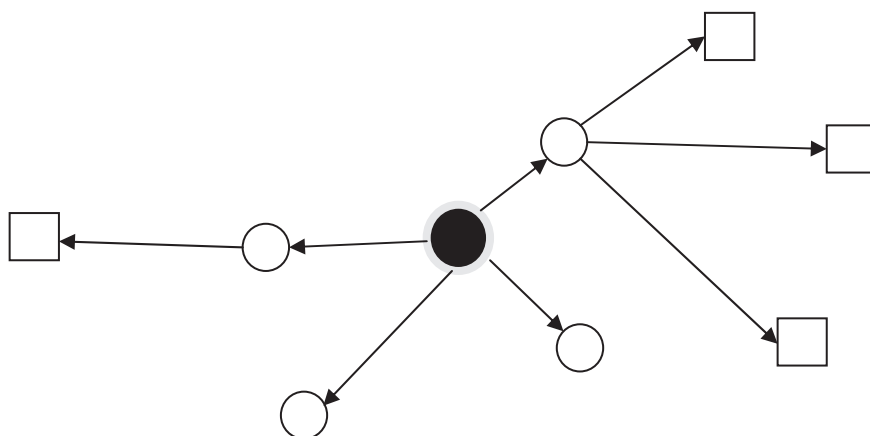


図1：放射状カテゴリーのイメージ (辻 2002: 238)

ンバー（プロトタイプ）を，○は2次的メンバーを，□は3次的メンバーを表している。すなわち，プロトタイプの●から○へ，さらに○から□へとカテゴリー拡張が展開している。

なお，認知意味論において，このようなカテゴリー拡張を引き起こす要因（動機づけ）として主要な役割を演じるのが「隠喩（メタファー）」「換喩（メトニミー）」「提喩（シネクドキ）」と呼ばれる3つの比喩（言葉の綾）である。これらについて，佐藤（1992），瀬戸（1997），瀬戸（2007），初山・深田（2003）にしたがい，次のように定義する。

- (4) a. メタファー：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて，一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- b. メトニミー：二つの事物の間に存在する何らかの隣接性に基づいて，一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
- c. シネクドキ：一般的な意味を持つ形式を用いて特殊な意味を表す，逆に，特殊な意味を持つ形式を用いて一般的な意味を表す。または，種で類を，類で種を表す。

## 2. 日本語の「コトバ」の意味拡張

ここでは，「コトバ」の意味拡張についてみていくが，はじめに「コトバ」の複数の意味を認定する作業から始める。その手がかりとして，次のような3つの国語辞典に挙げられている「コトバ」の語義に関する記述を比較する。

『広辞苑』（第五版）	『大辞林』（第三版）	『大辞泉』（初版）
①ある意味を表すために、口で言ったり字に書いたりするもの。語。言語。 ②物の言いかた。口ぶり。語気。 ③言語による表現。 ④言葉のあや。事実以上に誇張した表現。 ⑤文芸表現としての言語。詩歌、特に和歌など。 ⑥謡い物・語り物で、ふしのつかない部分。また、歌集などで、歌以外の散文の部分。 ⑦物語などで、地の文に対して会話の部分。	①人の発する音声のまとまりで、その社会に認められた意味を持っているもの。感情や思想が、音声または文字によって表現されたもの。言語。 ②ものの言い方。ことばづかい。 ③言語を文字に書き表したものの文字。 ④語彙。単語。 ⑤謡物・語り物の中で、節をつけない部分。 ⑥和歌に対して、散文で書かれた部分。また、和歌の詞書。絵巻物の詞書。 ⑦意味。理性。ロゴス。 ⑧（「てにをは」に対して）体言・用言などの総称。詞（し）。 ⑨語気。ものの言いぶり。 ⑩ことばのあや。たとえごと。	①人が声に出して言ったり文字に書いて表したりする、意味のある表現。言うこと。 ②音声や文字によって人の感情・思想を伝える表現法。言語。 ③文の構成要素をなす部分。単語。また、語句。 ④言い方。口のきき方。口ぶり。言葉遣い。 ⑤必ずしも事実でないこと。言葉のあや。 ⑥謡い物・語り物の中で、節をつけない非旋律的な箇所。 ⑦物語・小説などの中で、会話の部分。 ⑧歌集などで、散文で書かれた部分。

以上、3つの国語辞典に挙げられている語義の記述を参考にして、「コトバ」について、次のような12個の異なる語義を認定することにする：①言語体系、②単語、③専門用語、④シンボル、⑤発話、⑥発話内容、⑦言い回し、⑧語気語調、⑨スピーチ、⑩個別言語、⑪方言、⑫訛り。

## 2.0 「コトバ」の基本義：＜言語体系＞

基本義とは、さまざまな転義への意味拡張の起点となる、放射状カテゴリーの中心に位置する語義である。本論では、基本義の特徴として、初山（2002：107）、初山・深田（2003：142）、瀬戸（2007：4）にしたがい、次のような3つを仮定する<sup>2)</sup>：

- ①複数の語義（＝多義）の中で最も基本的な語義である。
- ②具体性（または、身体性）が高く、最も想起されやすい語義である。
- ③意味拡張の起点となる語義である；関連する他の語義（転義）の理解の前提となる。

管見の及ぶ限り、日本語の「コトバ」について、認知意味論の枠組みでその多義構造について論じた先行研究<sup>3)</sup>はなかったように思われる。「コトバ」の意味のプロトタイプ（＝基本義）は、次のような例に見られるものである。

- (5) a. ヒトの特徴として、火・道具・コトバの使用が挙げられます。  
 b. 「もし世界中の人達が共通の言語を持てばまたよからぬ事をたくらむに違いない」。聖書に書かかれたバベルの塔の話は、なぜ国や地域によって話すコトバが違うのだろうかという疑問に対して与えられた、よく知られた回答の一つと言えます。

このように「コトバ」の第一義的な意味は「意思伝達のために用いられる音声による、ある共同体に所属する人間が共有するコミュニケーションの手段」である。したがって、「コトバ」のプロトタイプとして、次のような3つの特徴を仮定できる：

- (6) a. 人間の共同体や社会で慣習化され共有されている  
 b. 人間の口から発せられる、意味と結びついた音声  
 c. 人間が思考やコミュニケーションのために用いる

したがって、「コトバ」のプロトタイプ的な意味としては、人間がコミュニケーションの手段として用いる一定の体系をなす<言語体系>という意味を仮定するのが妥当であると思われる。

## 2.1 基本義からの転義：<言語体系>から<個別言語>へ

次の例で「コトバ」は「ある特定の社会や集団に所属する人間が共有する共通語」を指す。

- (7) a. 日本の国で話されているコトバは日本語です。  
 b. 世界で一番話されているコトバって何語ですか？

ここで「コトバ」は「国家などある特定の言語共同体において使用される標準語」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<言語体系>から<個別言語>への意味拡張を認定できる。

### 2.1.1 転義からの転義：<方言>

次の例で「コトバ」は「ある個別言語が話される地域の一部で話される地域の言葉」を指す。

- (8) a. 青森と沖縄ぐらい離れているとコトバの違いが非常に大きくなります。  
 b. 北は北海道から南は沖縄まで、その地域ごとに使われるコトバには違いがあり、方言というものは実際にその土地で暮らしている人でないとなかなか使いこなせないものです。

ここで「コトバ」は「ある個別言語の地域ごとの変種」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる〈個別言語〉から〈方言〉への意味拡張を認定できる。

### 2.1.2 転義からの転義：〈訛り〉

次の例で「コトバ」は「ある方言に特有の音声・音韻的特徴（アクセントやイントネーション）」を指す。

- (9) a. コトバは国の手形。(諺)  
 b. 何年も東京に住んでいるのに亮子さんのコトバにはまだ訛りがあります。

ここで「コトバ」は「個別言語の方言に付随する音声的な特徴」という意味で用いられている。つまり、近接性に基づくメトニミーによる〈方言〉から〈訛り〉への意味拡張を認定できる。

## 2.2 基本義からの転義：〈言語体系〉から〈単語〉へ

上で「コトバ」の基本義を、「音素、単語、文などの人間言語の構成要素の総体としての体系」すなわち、〈言語体系〉と仮定した。しかし、次の例の「コトバ」は、「言語の構成要素の一部として単語」を指す。

- (10) a. 赤ちゃんが生まれて初めて口にするコトバの代表として「ママ」や「パパ」があげられます。  
 b. その昔、マイクを使える場が限られ、性能もよくなかった時代、政治家は一つ一つのコトバを選び抜き渾身の力を込めて聞き手の心に語りかけた。

ここで「コトバ」は「言語体系を構成する一要素としての単語」という意味で用いられている。つまり、部分（＝一つ一つの単語）によって全体（＝言語体系）を表すというメトニミーによる〈言語体系〉から〈単語〉への意味拡張を認定できる。

### 2.2.1 転義からの転義：〈専門用語〉

次の例で「コトバ」は「ある特定の分野で使用される特殊な意味を担う単語」を指す。

- (11) a. 医者の世界独特の「予後」「寛解」「侵襲」などのコトバは患者には難解なことがあります。  
 b. 「無罪」「事実」「殺意」など日常よく耳にするコトバでも裁判の判決文では全く違う意味で用いられます。

ここで「コトバ」は「特殊な分野や領域の専門家が用いる用語」という意味で用いられている。つまり、一般的な意味の言葉で特殊な意味を表すというシネクドキによる<単語>から<専門用語>への意味拡張を認定できる。

### 2.2.2 転義からの転義：<シンボル>

次の例で「コトバ」は「ある特定の脈絡や社会的状況において使用される特定の象徴的な意味を担った単語」を指す。

- (12) a. 朝顔の花コトバの意味は「結ばれた約束」です。  
 b. 結婚式などめでたい席では「別れる」「切れる」などの忌みコトバは使用しないのがマナーです。

ここで「コトバ」は「特定の事物や出来事と象徴的に結び付いた表現」という意味で用いられている。つまり、一般的な意味の言葉で特殊な意味を表すというシネクドキによる<単語>から<シンボル>への意味拡張を認定できる。

### 2.3 転義からの転義：<単語>から<発話>へ

次の例で「コトバ」は「人間が自分の意思・考えの表明や意図の伝達，すなわち，コミュニケーションのために発した言葉のまとまり」を指す。

- (13) a. 口は災いの元です。一度口から出したコトバが再び口の中に戻る事はありません。  
 b. 「ありがとうございます」というコトバが素直に出る人間なのかどうかなどは親の躰なのかもしれませんが、「ありがとうございます」「申し訳ございません」などのコトバが出てこない若者をこれからどのように再教育していくかも社会の抱えた課題ではないかと思っています。

ここで「コトバ」は「いくつかの単語から構成されるまとまった内容をもつ談話」という意味で用いられている。つまり、部分（＝単語）によって全体（＝発話）を表すというメトニミーによる<単語>から<発話>への意味拡張を認定できる。

#### 2.3.1 転義：<発話内容>

次の例で「コトバ」は「発話されたこと（発言，話）の中身や内容」を指す。



- (14) a. 最近の政治家のコトバはあてになりません。  
 b. 首相はもっと自分のコトバに責任を持つべきだ。

ここで「コトバ」は「発言や話に付随する伝達内容」という意味で用いられている。つまり、近接性に基づくメトニミーによる<発話>から<発話内容>への意味拡張を認定できる。

### 2.3.2 転義：<言い回し>

次の例で「コトバ」は「発話や発言に込められた言葉遣いや発言の方法」を指す。

- (15) a. 汚いコトバで相手を攻撃したり罵るだけなら誰にでもできますよね。  
 b. コトバは意識の表れです。コトバをあらためるだけで意識や行動が変化することもあります。

ここで「コトバ」は「発言や発話にまつわるものの言い方、伝え方」という意味で用いられている。つまり、近接性に基づくメトニミーによる<発話>から<言い回し>への意味拡張を認定できる。

### 2.3.3 転義：<語気語調>

次の例で「コトバ」は「発話や発言に込められた言動の強さや発言の調子」を指す。

- (16) a. 老僧の法隆院がコトバをすこし荒らげて言った。  
 b. つまり、お詫びの表現にはコトバをやわらげる機能もあります。

ここで「コトバ」は「発話に必然的に付随する発言のトーンや語気」という意味を表わす。つまり、近接性に基づくメトニミーによる<発話>から<語気語調>への意味拡張を認定できる。

### 2.3.4 転義：<スピーチ>

次の例で「コトバ」は「会合やパーティーなど、特定の社会的状況で人前で発せられる発話」を指す。

- (17) a. これよりご来賓の方よりお祝いのコトバを賜ります。  
 b. 開催校を代表して一言コトバを述べさせていただきます。

ここで「コトバ」は「ある場所で何らかの目的で発せられる発話」という意味を表わす。つまり、一般的な言葉で特殊な意味を表すシネクドキーによる<発話>から<スピーチ>への意味拡張を認定できる。

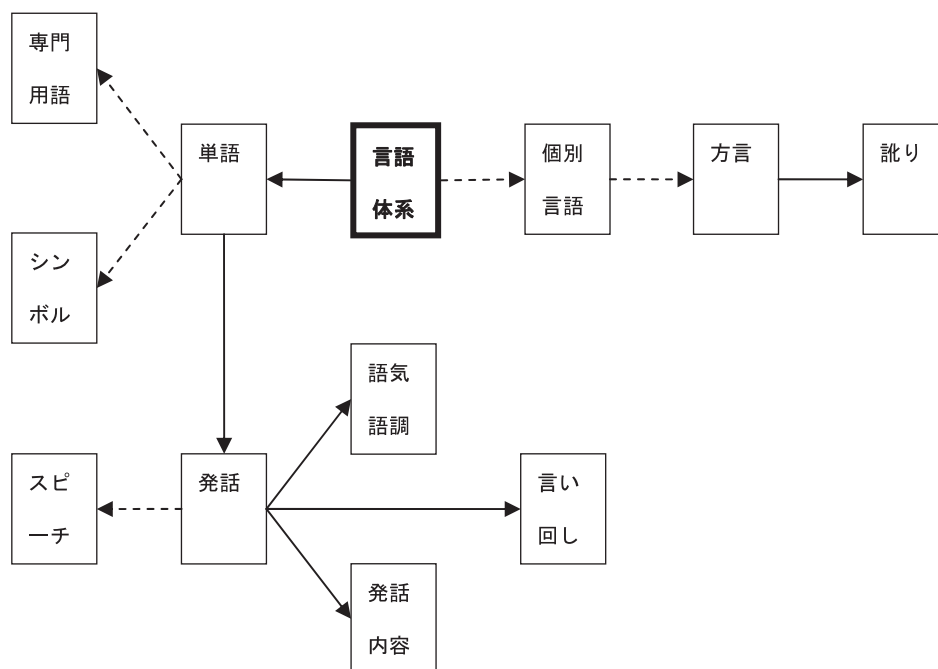


図2：日本語の「コトバ」の放射状カテゴリー（実線はメトニミー，点線はシネクドキーを表す）

### 3. 英語の“word”の意味拡張

ここでは、“word”の意味拡張についてみていくが、はじめに“word”の複数の意味を認定する作業から始める。その手がかりとして、次のような3つの英和辞典に挙げられている“word”の語義に関する記述を比較する。

新グローバル英和辞典	ルミナス英和辞典	プログレッシブ英和中辞典
①語，単語；（伝達手段としての）言葉；歌詞，せりふ ②短い言葉，一言，短い談話 ③約束；保証。 ④便り，知らせ；伝言；うわさ ⑤指図，命令；合い言葉 ⑥口論，議論 ⑦聖書，福音，神の言葉	①語，単語 ②（短い）ことば，文句；話，談話；ひとこと，密談 ③知らせ，便り，消息，報道；伝言；うわさ ④約束，誓言。 ⑤指図，命令；合いことば，スローガン ⑥口論，論争 ⑦神のことば；聖書，福音 ⑧（曲に対して）歌詞 ⑨〔電算〕ワード，機械語。 ⑩タブー（と思われる）語	①語，単語 ②議論，口論 ③表明，発言；最も適切な〔びつたりの〕言葉；合い言葉 ④たより，消息，知らせ，報道，ニュース；うわさ ⑤言葉，話，（短い）談話〔会議〕，ちょっとした話 ⑥指図，命令 ⑦請け合い，保証，約束 ⑧（曲に対し）歌詞；（芝居の）せりふ ⑨聖書；ロゴス；神の言葉，キリストの嘉信 ⑩コンピュータワード，機械語 ⑪タブーとされている言葉 ⑫ことわざ；格言

以上，3つの英和辞典に挙げられている語義の記述を参考にして，“word”について，次のような13個の異なる語義を認定する：①単語，②短い発話，③モットー，④命令，⑤約束，⑥知らせ，⑦福音，⑧談話，⑨会話，⑩口論，⑪スピーチ，⑫（芝居の）セリフ，⑬（歌の）歌詞。

### 3.0 基本義：＜単語＞

管見の及ぶ限り，英語の“word”について，認知意味論の枠組みでその多義構造について論じた先行研<sup>4)</sup>はなかったように思われる。したがって，“word”の意味拡張のプロセスを追うにあたり，まず，その出発点となる基本義（意味のプロトタイプ）を仮定することから始める。“word”の最も基本的な用法は次のようなものであると思われる。

(18) a. The first word that many babies speak will be "mama".

（赤ん坊の多くが初めて話すことばは「ママ」だろう）

b. Due to space limitations you are requested to keep your summary within 200 words.

（紙面が限られております都合上，要約は200語以内に収めて下さい）

このように“word”の第一義的な意味は「話しことば，または，書きことばとしての形式を備え，かつ，何らかの意味を担った言語の一単位」であって，日本語でいえば「単語」あるいは「語」<sup>5)</sup>という名詞が最もよくあてはまる。したがって，“word”のプロトタイプとして，次のような3つの特徴を仮定できる：

- (19) a. 要素：音声（音素）から構成されている  
 b. 構造：単独で使用される言語上の一単位  
 c. 機能：コミュニケーションで使用され意味を伝達する

したがって，“word”の意味のプロトタイプとしては、（音声言語<sup>6)</sup>としての単体の）＜単語＞を仮定するのが妥当であると思われる。

### 3.1 基本義からの転義：＜単語＞から＜短い発話＞へ

上で“word”の基本義を＜単語＞と仮定したように，“word”は、文字通りには、「単語一語、ひとこと」という意味で用いられる。しかし、次の例の“word”は、必ずしも文字通りの意味ではなく、「複数の単語からなる短い発話」を指す。

- (20) a. He always says one word too many.  
 (彼はいつも一言多いんだよ)  
 b. The situation was brought under control by one word from the president.  
 (社長の鶴の一声で一気に事態は収拾された)

ここでは、部分（＝単語）によって全体（＝短い発話）を表すというメトニミーによる＜単語＞から＜短い発話＞への意味拡張を認定できる。

### 3.2 転義からの転義：＜短い発話＞からの意味拡張

#### 3.2.1 <モットー>

次の例で“word”は「何ごとかを端的に表現するのにふさわしい言葉、あるいは最適な言葉」を指す。

- (21) a. In dealing with difficult children, "patience" is the word.  
 (難しい子供を扱うのに「忍耐」が合い言葉（ぴったりの言葉）だ)  
 b. Their word is "law." (i.e. their commands must be obeyed.)  
 (彼らの合い言葉は「法律」だ)

ここで“word”は「何かの行動や努力の目標や方針を表現した言葉や標語」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる＜短い発話＞から＜モットー＞への意味拡張を認定できる。

### 3.2.2 <命令>

次の例で“word”は「事前に取り決めた特定のことがらを相手に知らせる言葉」を指す。

- (22) a. On his word, they all moved forward.  
 (彼の合図で彼らはみんな前進した)
- b. The troops will go into action as soon as their commander gives the word.  
 (その一隊は司令官が命令を下せば直ちに出動することになっている)

ここで“word”は「特定の行動やアクションを誘発または要求するためのあらかじめ取り決められた号令」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<短い発話>から<命令>への意味拡張を認定できる。

### 3.2.3 <約束>

次の例で“word”は「当事者の一方が遂行すべきと取り決められたことがら、あるいは遂行することが期待されることがら」を指す。

- (23) a. Larry always keeps his word.  
 (ラリーはいつも約束を守る)
- b. You can take her at her word.  
 (彼女の言葉は信用できる)

ここで“word”は「二者の間に片方が遂行すべしと取り決められた特定のことがら」を意味している。つまり、シネクドキーによる<短い発話>から<約束>への意味拡張を認定できる。

### 3.2.4 <知らせ>

次の例で“word”は「誰かに伝えられた特定の情報や内容」を指す。

- (24) a. I have word that he will arrive tomorrow.  
 (彼が明日到着するという知らせを聞いた)
- b. I've written her twice but I haven't heard a word from her.  
 (彼女に2回手紙を書いたが便りが無い)

ここで“word”は「特定の情報を他者に伝えるためのもの」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<短い発話>から<知らせ>への意味拡張を認定できる。

### 3.2.5 <福音>

次の例で“word”は「(キリスト教の) 神からの知らせ, あるいは, メッセージ」を指す。

- (25) a. The Bible contains the word of God.  
 (聖書には神の言葉が書かれている)
- b. I am an evangelist called to preach the word of God.  
 (私は福音を説くために招かれた伝道者です)

ここで“word”は「神からの言葉, あるいは預言」という特殊な意味で用いられている。つまり, シネクドキーによる<短い発話>から<福音>への意味拡張を認定できる。

### 3.3 転義からの転義：<短い発話>から<談話>へ

英語の“word”の基本義として仮定した<単語>から<短い発話>への意味拡張が見られたが, 次の例の“words”は「いくつかの発話(文)が集合してできた, ある程度まとまった分量をもつ言語表現や文章」を指す。

- (26) a. I can't put my joy into words.  
 (この喜びはとても表現できない)
- b. Tom's words are often harsh, but his heart is in the right place.  
 (トムはよく厳しい言い方をするが悪意はないんだ)

ここで“word”は「いくつかの発話からなるある一定の長さの言語表現」という意味で用いられている。したがって, 「部分」(= “word”)によって「全体」(= “words”)を表すというメトニミーによる<短い発話>から<談話>への意味拡張を認定できる。

### 3.4 転義からの転義：<談話>からの意味拡張

#### 3.4.1 <スピーチ>

次の例で“words”は「何らかの目的で聴衆の前で行われる発言, あるいは聴衆に対して伝達される談話」を指す。

- (27) a. Ms. Smith will now say a few words.  
 (スミスさんよりおことばをいただきます)
- b. These words are those of J.F. Kennedy, whom Bill Clinton resembles, in a famous speech delivered 30 years ago.

(これらのことばは J.F.ケネディ (ビル・クリントンは彼に似ている) が30年前に行った有名な演説からのものである)

ここで “words” は「一人の話し手が何らかの目的で聞き手に対して伝える談話」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<談話>から<スピーチ>への意味拡張を認定できる。

### 3.4.2 <会話>

次の例で “words” は「一人が一方通的に発する発話ではなく、二者間で交わされる言語表現」を指す。

- (28) a. We exchanged a few words.  
 (私たちは少しことばを交わしました)  
 b. Can I have a few words with you?  
 (ちょっとお話してもいいですか)

ここで “words” は「二人の当事者の間で何らかの目的で交わされる談話」という意味で用いられている。意味が特殊化しているので、シネクドキーによる<談話>から<会話>への意味拡張を認定できる。なお、次の例の “words” は<会話>の意味で使用されているともいえるが、「一方が他方に対し、自分の正当性を主張する目的で交わされる会話」という点で意味が特殊化している。

- (29) a. Jack and Jill had words over which one spilled the pail of water.  
 (ジャックとジルはどちらがバケツの水をこぼしたかで口論していた)  
 b. I had words with Charlene last night over whose turn it was to wash the dishes.  
 (どちらが皿を洗う番かを巡って、私は昨夜シャーリーンと口げんかした)

ここで “words” は、シネクドキーにより、さらに意味が特殊化して、<会話>から<口論>への意味拡張がみられる。

### 3.4.3 <セリフ>

次の例で “words” は「映画や演劇の中で俳優や役者が話す言葉」を指す。

- (30) a. words in movies  
 (映画の台詞)  
 b. I was impressed as the character in the movie said his final words.  
 (映画の中の登場人物が最後のセリフを言った時は感動した)

ここで“words”は「演劇、芝居、映画など特殊な状況で使用される、あるいは使用のために創作された談話」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<談話>から<セリフ>への意味拡張を認定できる。

### 3.4.4 <歌詞>

次の例で“words”は「歌、歌曲、オペラなど特殊な状況で使用される、あるいは、使用のために創作された談話」を指す。

- (31) a. the words of *Moon River*  
 (「ムーンリバー」の歌詞)  
 b. I can hum the tune, but I don't know the words.  
 (その曲はハミングできますが、歌詞を知りません)

ここで“word”は「歌の中の言葉、すなわち歌詞」という意味で用いられている。つまり、シネクドキーによる<談話>から<歌詞>への意味拡張を認定することができる。

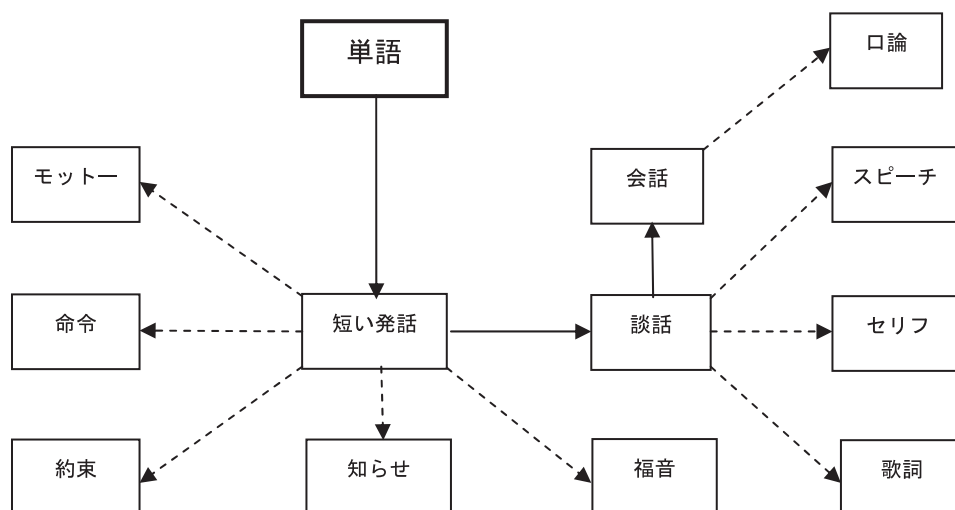


図3：英語の“word”の放射状カテゴリー（実線はメトニミー，点線はシネクドキーを表す）



#### 4. おわりに

本論では、日英語の多義語「コトバ」と“word”について、それらの多義構造と意味拡張を誘発する心理的動機づけについて、認知意味論的観点から分析を行った。その結果、明らかになったのは次のような点である：

- ① 「コトバ」と“word”は多義語であり、意味拡張の結果生じた語義（＝転義）は、それぞれ相互に関連性のある語義の放射状カテゴリー（＝意味のネットワーク）を構成する。
- ② 「コトバ」と“word”の各転義への意味拡張の動機付けとなる要因については、メトニミーとシネクドキーの原理が大きな位置を占める（メタファーによる転義は観察されない）。
- ③ 「コトバ」と“word”は類似した意味を持つが、基本義が異なる：「コトバ」には＜言語体系＞を、これに対し、“word”には＜単語＞を仮定できる。
- ④ 「コトバ」と“word”は、＜単語＞＜発話＞＜スピーチ＞などの共通した語義もあるが、むしろ、共通したものよりも意味拡張により独自の語義を展開している。

#### 【注】

- 1) 多義語の認知意味論的分析の手法については初山（2002）、初山・深田（2003）を参照。
- 2) その他、用法上の制約を受けにくい、言語習得の早い段階で獲得される、使用頻度が高いことが多い、の特徴も付け加えることもできる。
- 3) 日本語の名詞「コトバ」について意味論的観点から取り上げたものとしては、風間・他（1993：1）および池上（2006：13-16）があるが、いずれも多義語の一例として、その多義性の一部について言及したもので、「ことば」の多義構造について、基本義から転義への意味拡張や意味拡張の動機づけについて論じたものではない。
- 4) 英語の名詞“word”について意味論的観点から取り上げたものとしては、瀬戸（2007）が該当するともいえるが、これは研究論文ではなく、認知意味論的枠組みで執筆された辞書であるため一応先行研究からは除外した。
- 5) 「文法上の意味・職能を有する、言語の最小単位。文の成分となる。」（広辞苑第五版）、「言語単位の一。文構成の最小単位で、特定の意味、文法上の職能を有するもの。語。」（ハイブリッド新辞林）など国語辞典における「単語」の定義との共通点が多い点が日英対照言語学的見地から興味深い。
- 6) ここで、文字言語としての“word”はプロタイプに含まれるのか、ということが問題になるが、百科事典的知識として、文字体系を持たなくとも、音声を持たない言語は皆無であるということから、“word”の本質は音声言語としてのものである、と仮定しておくことが妥当である。むしろ、文字言語としての“word”の意味は、音声言語としての“word”が属する「聴覚」の領域から「視覚」の領域に写像されたこと、すなわち、メタファー（隠喩）によって派生したと捉えることができる。したがって、典型的には、音声言語として個々に発せられた「ことば」（単体としての単語一語）がこれに最もよく該当する事例であると考えられる。

#### 【参考文献】

- 池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』NHK ブックス。  
 風間喜代三・他（1993）『言語学』東京：東京大学出版会。

- Labov, W. (1973) "The Boundaries of words and Their Meanings," In: C.J.N. Bailey and R.W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*. Washington: Georgetown University Press. 340-73.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 皆島博 (2009) 「英語の名詞 word の多義構造」『福井大学教育地域科学部紀要』(第 I 部人文科学編), 65 : 9-21.
- Rosch, E. (1975) "Cognitive Representations of Semantic Categories," *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京：研究社。
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 東京：大修館書店, 73-134.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫。
- 瀬戸賢一 (1997) 「第 II 部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一 『文化発想とレトリック』(日英語比較選書 ①) 94-177. 東京：研究社。
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館。
- Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, J. R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (2nde.). Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社。
- Wittgenstein, L. (1978) *Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.